



ブック

著者は、戦後の転機として、石油危機とバブル崩壊を挙げ、とくに後者について、完全失業者の増大など、日本経済は「底が抜けた状態」になったとする。それ以前の団塊世代などの「戦後日本型循環モデル」において

は、仕事・家族・教育という三つの社会領域が結合され、父の賃金↓家族↓子への教育費↓新規労働力というかたちで、社会が文字通り「まわっていた」。

1995年の日経連「新時代の日本的経営」は、多様な形態の非正社員の活用による事業の維持の姿勢に「お墨付き」を与えた。これ以降、「家族を食わず」に足るだけの収入が得られない男性の非婚化が進んだという。また、余裕層の中に、不透明社会に対して過剰なほど教育熱心な親が現れた。40人教室に、塾で3学年も先のことを

社会を結びなおす

教育・仕事・家族の連携へ

本田 由紀

本田由紀 著
562円 岩波ブックレット
☎03-5210-4000

社会を結びなおす

教育・仕事・家族の連携へ

「戦後日本型循環モデル」はどのようなものか。著者は、戦後日本型社会の行き詰まりと崩壊をくすため、新たな見取り図を、読者の皆さんと共有したい。

岩波書店発行 定価562円（税別）
ISBN 978-4-16-760000-0

学んでいる者と、家族の困窮や不和に苦しんで学習に向かえない者がおり、この教育格差と、家庭からの期待や要求の強まりの中で、教師は疲弊しているという。

著者は、次のとおり新しい社会モデルを提示する。「組織の一員としての身分を与えられる」「メンバーシップ型から、一定の熟練や専門性に基つて遂行される、ひとまとまりの行為」としてのジョブ型

正社員への移行。将来に向かって生きていくための「中間的就労」などを支援する「アクティベーション」。そして、学校の役割を、「保護者や地域に開かれた学校」「家族へのケアの窓口」と位置づける。

「社会がうまくまわらなくなった」「現在、どういう職業意識をもった子どもたちを育てればよいのか。うまくまわっていた」団塊世代とは異なる考え方が必要なのだろう。

（聖徳大学教授・西村美東士）